



TITLE:

計画:1-4 中国地方の野生ニホンザルの分布と個体群の動態(Ⅱ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

上田, 丞; 林, 勝治; 田中, 浩; 村田, 満; 吉岡, 龍太郎;
村崎, 修二; 小村, 洋子; 小田, 博之; 駅場, 春樹; 藤下,
積

CITATION:

上田, 丞 ...[et al]. 計画:1-4 中国地方の野生ニホンザルの分布と個体群の動態(Ⅱ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1992, 22: 54-55

ISSUE DATE:

1992-10-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164388>

RIGHT:

は前川グループが行動域を見瀬からさらに西の柏野へと広げたために有害鳥獣駆除の対象となった。阿蘇郡一の宮町の脱走グループは平成3年4月には阿蘇町のいこいの村周辺に一時居着いたが、7月には阿蘇山根子岳の北裾野から半周した南裾野へ現れるようになった。そのほかに球磨郡では錦町の集団が人吉市へ、球磨郡の集団が同じく人吉市へ侵入し被害を増加させている。

上記のように熊本県では行動域の拡大が顕著で、同時に個体数の増加が進行していよう。

計画：1-3

群馬県霧積・妙義山系における野生ニホンザルの分布と生息環境

上原貴夫（長野県短大）

対象地は群馬県碓氷郡松井田町、甘楽郡妙義町、下仁田町である。「長谷部言人 大正12年ニホンザル棲息状況調査」（水戸幸久氏判読注）によると、当時、現松井田町では生息は無く、妙義町では「寡」として生息、下仁田町では「転来スルモノ」と記録され、続く南牧村地域では「伐採区拡大ト共ニ数年后ニハ絶無トナルヘシ」と記録され、いずれにしろそれほど多くない状態で生息や出没がみられていたと考えられる。しかし、現在では、むしろこれら一帯に多く生息・遊動している。先の調査時点とは逆転した状況となっている。

特に松井田町の霧積川流域、湯ノ沢および水谷地区、国道18号線沿い（碓氷峠一帯）、同バイパス沿いの遠入、赤坂、明賀、恩賀、下手地区、山麓部の横川、高墓、御所平、五料、梅ヶ丘に多い。同地域では1987年、88、89年頃にかけて次第に遊動域が山麓の農地や住宅地等に拡大・定着化してきた。一時期、碓氷峠一帯での遊動が減少することもみられた。妙義山系方面（妙義町、下仁田町一帯）では白雲山と山麓の諸戸地区、金鶏山、上小坂、菅原地区、金洞山、松倉地区、御堂山、中野、半弓、上野、初鳥屋、芝ノ沢地区一帯に遊動する。全般に遊動域は相当に拡大してきた。霧積山系方面では倉淵村や長野県軽井沢町にも出没している。妙義山系方面でも下仁田町では次第に西の長野県佐久市寄りに、また、市ノ萱川を越えた地域に近年出没を広げてきている。

現在の動向については主な生息域である山中において高速道（上信越自動車道、93年供用開始）

や高圧鉄塔（群馬-山梨幹線、88年工事開始）、北陸新幹線（89年輕井沢起工式）などの大規模工事が相次いで開始されたことや猿害（最初の報告は80年妙義町、下仁田町、82年松井田町）とその対策の進行などが影響していると考えられる。猿害対策としての駆除は過去5年間（86年度～90年度）で松井田町134、妙義町19、下仁田町113、合計266個体である。今後、特に高速道は松井田町において生息・遊動密度の高い地域を分析し、インターチェンジ、サービスエリアも設けられるなど影響も大きいと考えられる。今後の動向を注意深く見つける必要がある。

計画：1-4

中国地方の野生ニホンザルの分布と個体群の動態

上田 丞・林 勝治（宇部短期大）
田中 浩（三田尻女子高）
村田 満（三田尻女子高）
吉岡龍太郎（下松工業高）
村崎 修二（猿舞座）
小村 洋子（益田高）
小田 博之・駅場 春樹・藤下 積

今年度はアンケート法により山口県の野生ニホンザルの分布についての調査をした。また島根県で、テレメーター法による調査の検討と群れ数の把握を計画した。結果および今後の調査問題点は次の通りである。

アンケートの結果：山口県の全域を対象として、1987年度と全く同じ方法で野生ニホンザルの分布調査を試みた結果、分布に変化はなかった。アンケートだけの集計であるが、群れ数は40群（1987）から51群（1991）に増加したにもかかわらず、全頭数は変わっていなかった。したがって、一群あたりの平均頭数は30頭前後からおよそ25頭に少なくなっていた。

アンケートの検討：山口県岩国市の野生ニホンザル生息地で全自治会長にアンケート用紙を配付し、1991年10月15日から11月15日の間、ニホンザルと遭遇した自治区の人およびその時のサルの状況の記録を依頼した。

この結果、岩国市には30頭前後の群れが2群、5頭前後の小集団が2グループいることが分かった。

このアンケート方法は期間がおおよそ1カ月だけであったが、群れを特定する方法としては有効であった。しかし、今回は山口県庁をとおして、被害対策のための調査と位置づけられていたため、緻密な資料が収拾できたと考えられる。正確で緻密なアンケート調査を行うには、目的を明確にするとともに、アンケート対象者の立場を配慮しなければいけない。

まとめ：今年度は島根県でテレメーター法による追跡調査を計画していた。しかし、捕獲と再捕獲の体制がとれず先送りになってしまった。捕獲と追跡の体制づくりはゆっくりと取り組んでゆきたい。

群れサイズの小型化は岩国市の野生ニホンザルの群れにも見られた。

計画：1-5

近畿圏におけるニホンザルの分布の実態調査 -その2

清水 聡・武田 庄平・金澤 忠博
(大阪大・人間科学)

近畿圏におけるニホンザル分布の実態調査の3年目として、今年度は昨年度に引き続き兵庫県における生息実態の調査を行った。

昨年度調査質問紙を送付して回答のなかった市役所、町・村役場に再度調査質問紙を送付し回答してもらったところ、昨年度分と合わせて結局91市町村の内91.2%にあたる83市町村より回答が得られた。

調査質問紙による分布状況は昨年度と同様であった。すなわち、1) 1970年代から複数回行われてきた過去の生息実態の調査が認められた地域には現在もニホンザルが生息していること、2) 昔は生息していたが、1970年代の調査において否定された但馬北東部において新たに集団の生息が確認されたこと、の2点である。

1) については、一部地域(美方町、春日町、大河内町、西紀町)で1980年代に大量の捕獲が実施され、集団数および個体数は減少している可能性が高いが、地域個体群として絶滅したわけではなく、従来から集団が生息していた地域では現在も生息し続けていることが明らかになった。

2) については、数度の実地調査を行った結果、豊岡市、城崎町、竹野町、日高町にまたがる地域

に3~4集団100~150頭が生息していることが明らかとなった。1970年代の調査で生息が否定されたこの地域において、1980年代になってニホンザルの生息が確認されるようになった理由については明らかにならなかったが、この地域においては、猿害は拡大しているようであった。この理由としては、植林、山村の開発等の理由の他に、転作によって米以外のサルの餌となる食物を山裾の畑に作るようになったことが考えられた。

上述した調査質問紙に対する回答結果および、実地調査の結果から、現在のところ兵庫県に生息するニホンザルは、ごく大ざっぱに見積もって、集団数は20~25程度、頭数としては800~1200程度といったところであると推定される。

計画：1-6

伊豆・箱根地域のニホンザルの分布と個体数

岡野美佐夫、泉山 茂之、濱崎伸一郎
(財)野生動物保護管理事務所)

今年度は、伊豆地域を対象に聞き取り調査を実施し、昨年度のアンケート調査の結果を補足、検討した。

聞き取り調査を実施した地域は、熱海市、大仁町、伊東市、中伊豆町、東伊豆町河津町、下田市、南伊豆町、松崎町、西伊豆町、賀茂村、土肥町、天城湯ヶ島の13市町村で、動物分布調査(環境庁1978年)の5キロメッシュ区画にして38区画に該当する。聞き取りは、農家や林業従事者を対象に、原則として1区画あたり4地点以上で実施し、全体で167件の聞き取り情報が得られた。その結果、伊豆半島において群れが分布する地域は、神奈川県湯河原町と隣接した熱海地域と、天城山脈より南の伊豆半島南部地域(伊東市南部、東伊豆町、河津町、下田市、南伊豆町、松崎町)の2地域であった。

昨年度の結果と合わせると、伊豆・箱根地域に生息するニホンザルの群れは、①箱根地域(群れ生息区画数：12)、②愛鷹山地域(群れ生息区画数：6)、③伊豆半島南部地域(群れ生息区画数：17)の3つの地域個体群に分かれ、①と②は東西に約10km、①と③、②と③は南北にそれぞれ20km、35kmほど離れて分布していることがわかった。

この結果を環境庁の動物分布調査の結果と比べると、群れの生息区画数が大幅に減少(50→35)